

実践報告

小学校における英語教育のための指導者育成プログラム

Teacher Training for Elementary School English Education

ハビック真由香

Mayuka HABBICK

Key words : 英語学習の基盤づくり, 英語発音とリズムの指導, 学習者の主体性を育む

Building the solid foundation of learning English, Pronunciation and Rhythm, Learner Autonomy

1. はじめに

2020年より公立小学校で英語が教科化されるにあたり、改めて小学校で英語を学習する意味を考察する上で無視することができないのは、英語の発音指導である。現行の学習指導要領第4章【外国語活動】にも、「日本と外国の言語や文化について体験的に理解を深めることができるよう、外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさを感じること」を指導すると明記されている。

筆者の過去30年に渡る指導経験から、小学生の年齢では、分析的にはなく包括的に学ぶ姿勢を持っているので、体験したことを丸ごと身につけることができるといった特性があると考え。つまり、学習者は年齢が低いほど、指導者が与えたものをそのまま習得する。その意味において、小学校英語指導者が児童に聞かせる英語の音が、以降の彼らの英語学習の基盤をつくと考えよう。

また、低学年から中学年の時期には他者との比較分析能力が育つ (Knoop, 2002) ので、指導者の発音がネイティブスピーカーのそれと著しく異なる場合には、指導者に対して批判的な態度を取りかねない。

小学校英語の指導者が身につけるべきスキルは、正しい発音ができることはもちろん、児童の口から正しい音が出るようにする発音指導スキルを含む。そのためには、「見せる発音」と言う概念を持つことも必要だと筆者は考える。

ここでは、大東文化大学英語学科の専門教育科目であ

る「英語教育学研究IA」の実践内容と、それぞれに対する学生の反応を紹介しながら、小学校における英語教育のための指導者育成プログラムの在り方について考察してみたい。

2. 「英語教育学研究IA」

本授業の概要は次のとおりである。

- (1) 小学校での英語教育を実践するために必要な知識を学び、実際の技能、特に音声的能力を向上させる
- (2) フォニックスを音の側面から体系的に学ぶ
- (3) 既存の語彙力や文法知識を基にして、英語らしいリズムを体現できるようになる
- (4) 小学校英語活動(授業)を円滑に、また効果的に実施するために必要なアクティビティを学び、児童・生徒のレベルに応じたアクティビティを創り出すための方法を学ぶ

そして、本授業における具体的な到達目標は、次の4点とした。

- (1) 英語音韻認識指導の重要性を認識し、その具体的な内容について説明することができる
- (2) 英語の主要な音素の調音の仕方を理解する
- (3) 基本的なフォニックスのルールを知り、それを使って読んだり書いたりできる
- (4) 教室で児童生徒に話しかけるための英語表現を、正確な発音と英語のリズムで言うことができる

2.1 授業内容

前期15回の授業の中で先の4つの目標に到達するため、まず初めの2回の授業で、小学校英語教育の現状理解と今後の見通しについて、そして小学校英語教育において英語音韻認識の指導がどういう意味を持つのかなどを伝えることにより、受講生に本授業に対する動機づけをした。そして、次の7回は毎回授業の始めに英語発音に必要な呼吸法の練習と調音器官の筋肉トレーニングを行ったうえで英語の各音素を作り出す実践、続く4回をフォニックスのルールにあて、残りの2回は授業を英語で進めるための指示英語表現などを使ってさらに発音練習をした。

具体的な活動内容は表1のとおりである。

表1 活動内容

回	活動内容	
1	概要 小学校英語の現状と今後の見通概観と、英語音韻認識という概念について	
2	英語音韻認識の具体的な指導法	
3	英語発音のための呼吸法と調音器官の筋肉トレーニング	
4	英語音素の発音	子音：破裂によってつくる音
5		子音：摩擦によってつくる音
6		子音：破裂でも摩擦でもない音
7		母音：3×3の表で口の形を整理
8		母音：二重母音
9	発音のまとめ	
10	フォニックス	5つの短母音・5つのアルファベット読みする母音(前半)
11		5つのアルファベット読みする母音(後半)
12		それ以外の5つの母音
13		付加的なルール、小テスト
14	発音練習	フォニックスルールの確認と教室英語表現(前半)での発音練習
15		教室英語表現(後半)と基本的な英単語での発音練習

2.2 授業内容の詳細

(1) 概要

①小学校英語の現状

現行の小学校指導要領から、小学校外国語活動の目標と内容を確認し、また、「小・中学校の目標は『言語や文化への理解』があるが、(中略)英語教育においては、『ことば』という視点を導入することによって、国語との連携、母語の効果的運用のための力を育成、外国語の効果的運用に必要な外国語知識を身につけるための基盤が形成できることから、小学校段階で母語を利用して、『ことば』の仕組みや働きに気付かせること、世界に多くの言語があることを理解させる配慮が必要であること、

豊かな『ことば』への気付きは母語と外国語の効果的な運用を可能とすることが重要で有り、『ことば』への関心を高めることが必要」(文部科学省, 2016)という点を確認した。

②英語音韻認識

英語音韻認識 (Phonological Awareness) の3つの段階それぞれについて、具体的な活動を交え、体験的に学べるアクティブラーニングの手法で紹介した。

1) 音節の感覚 【母音を中心とした音の単位】

活動例：①Clap Your Hands, ②単語チャンツ

2) 音の塊をとらえる感覚

【語頭の子音+母音&子音】

活動例：①One or Two?, ②音の入れ替え

3) 音素の識別 【15個の母音と26個の子音】

活動例：①英語五十音, ②母音早口言葉

中でも音節の感覚を身につけつつ、単語やセンテンスの定着を図ることができるジャズチャンツ (Graham, 2006) については、オリジナルの単語チャンツを作成する方法について詳しく教授し、小学校英語の現場ですぐに活用できるように指導した(表2)。

表2 オリジナル単語チャンツの作り方

1	トピックを決める (例) 昆虫
2	思いつく単語を書きだす
3	それぞれの単語を音節の数によって分ける (例) 1音節: bee, ant, worm 2音節: beetle, cricket, spider 3音節: ladybug, butterfly, dragonfly
4	パターンに合わせてそれぞれが単語を選ぶ (例) 2-3-1 cricket, ladybug, bee 2-3-1 cricket, ladybug, bee 2-3-2-3 cricket, ladybug, cricket, ladybug, 2-3-1 cricket, ladybug, bee

(2) 英語音素の発音

まず、日本語よりも多くの呼気を要する英語の発音を明確にできるようになるための呼吸法と、唇や舌といった調音器官の筋肉トレーニングの方法を伝え、これを毎回の授業の始めに繰り返し実践した。

音素の指導は、呼気のコントロールをより実感してもらうため、「破裂の子音」→「摩擦の子音」→「それ以外の子音」の順に導入した。

次に、母音は、口の縦開き幅と横開き幅の違いを基に、縦横3×3のマスで整理して順番に体感しながら発音した(図1)。

iː		uː
i		u
eɪ	əː	oʊ
e	ʌ(ə)	
		ɔː
æ	ɑ	

図1 母音表：音の出しわけのための口の形を示す表

発音練習課題として、以下の英語早口言葉を活用した。

- ① She sells seashells by the seashore.
ʃiː sɛlz siːʃɛlz baɪ ðə siːʃɔːr
- ② Shoes and socks shock Susan.
ʃuːz ənd sɒks ʃɒk suːzən
- ③ The witch wished a wicked wish.
ðə wɪtʃ wɪʃt ə wɪkəd wɪʃ
- ④ Nine nice night nurses nursing nicely.
naɪn naɪs naɪt nɜːsɪz nɜːsɪŋ naɪsli

このころには、受講生は発音記号での表記にかなり慣れており、正確な英語発音を識別するために便利であるという認識ができていた。

(3) フォニックス

一つ一つの英語音素に対する認識とそれぞれの音の出し方が理解できたうえで、音を文字で書き表す際のルールとしてのフォニックスについて、知っている単語を事例として上げてもらいながら整理した。

同じ子音でも、単語の始めにあるか中にあるか、どんな母音の後ろにあるかによって、表記に使う文字が異なる場合があることを、受講生が既知の単語を例に挙げながら整理することによって、音と綴りのルールを発見し、納得しながら進めるという方法を取った。

その結果、フォニックスを「文字の読み方」という側面ではなく「音の書き表し方」という側面から整理すると、例外がとて多少なくなるので、ルールを理解しやすくなることを実感してもらうことができた。

(4) 発音練習

この授業のまとめとして、最後に、簡単な英単語を使って発音練習した。さらに実践的にフォニックスの知識を身につけることを目的として、知っている単語だから読めるではなく、フォニックスのルールを応用してつづりから音を読み解くという方法を取った。

また、教室で使う英語表現を用いて、英語のリズムについても解説しながら実際にそれらのセンテンスを練習してもらった。

教室で使う英語表現は、①あいさつ、②注意をひくための声掛け、③褒め言葉、④動作を促すための表現の4つのカテゴリーに分け、小学校英語をできるだけ英語で進められるスキル習得を目指した。

これらのスキルトレーニングと並行して、小学生の年齢の子どもたちに対するアプローチの仕方として、「child-centeredの授業とは何か」「子どもをやる気にさせるには」「努力と成長に注目した効果的な褒め方」(Dweck, 2007) について具体例を交えて伝えたほか、将来の小学校英語指導者になる受講生自身が積極的に学習に取り組む姿勢を伸ばしてもらうために繰り返し以下の2点を伝えた。

①朝のあいさつ一つにしても、言葉に気持ちを載せるために、まずは笑顔で

②あなたの疑問は、他の人はまだ気が付いていない疑問かもしれないので、恥ずかしがらずに質問すること

そして、「教えることが一番良い学びの方法」なので、理解を促すためにグループワークを多用した。



図2 グループワークの様子

2.3 受講生の感想

それぞれの内容に関して、受講生の反応は以下のようであった。

(概要について)

・日本語は母音と子音を一音素として捉えているのに対し、英語は、母音は母音、子音は子音として別々の音素として捉えていることが分かった

- ・英語はA, B, C, Dという読み方から入り、つづりをやり、と言う教え方ではない。“音”から入って、英語のリズムを子どもたちが遊びながら学んでいけるようにすると良いということを学んだ。
- ・Jazz Chantsが面白かったです。簡単にリズムが取れて、たくさん単語も言えて、参考にしたいと思いました。

(発音について)

- ・今までの発音の仕方が間違っていたことにとっても驚きました。自分が教えるときには正しい発音を教えようと思いました。
- ・破裂音と摩擦音の違いを自分で体験することによって、わかりやすくなりました。正しい口の形で発音することで、聴くほうもできるようになると実感できました。
- ・“舌の位置を変えるだけで音が変わる”は、本当にキーポイントだと思います。
- ・母音を詳しくやったので、発音記号を見て、口の動かし方がわかるようになってきました。

(フォニックスについて)

- ・普段意識せずに使っていた単語のつづりがここまで規則的だとは思っていませんでした。入門期からやりたかったです。
- ・フォニックスのルールがわかると、音を聞いて文字に出来ることが分かった。このルールを中学生の時から知っていたら、もっと英語が理解できたと思う。
- ・つづりのルールにより、発音にもルールが影響していることがよくわかりました。私は、一つ一つの単語によって発音の仕方が違うと思っていたので、つづりが関係していることにとっても驚きました。
- ・単語を探して書き出してみても、様々な共通点がわかり面白かったです。

(発音練習について)

- ・数字や色、曜日などの基本的な単語の発音をしてみても、とても難しかったです。口の形を正しくすることで正しい発音ができると実感しました。
- ・少しずつ、発音記号を頭で思いうかべながら発音することができるようになってきました。今までの発音の仕方と違って驚きがたくさんでした。
- ・発音のルールについて、単語から発音を考えることで、今までの勉強を深めることができた。そして、より、ルールに基づいているということを実感することがで

きて、とても楽しかった。

3. 考察

筆者は、学校英語が果たす役割は、子どもたちの中に質の良い種まきをすることだと考える。文法用語や専門用語は、小学校英語で教える必要はない。英語で楽しくコミュニケーション活動をする中で、発音・文法・用法について正しい英語をたくさん与えておけば、中学校以降の英語学習において「あ、そういうことか!」と気づく場面が増える。気づきこそが学びにつながる。

反対に、現状の学校英語教育は、整理すべき知識の量が圧倒的に少ない状態で文法を学習せざるを得ないために、文法学習が暗記になってしまっているのだと思う。「まかぬ種は生えぬ」と言う事である。

4. まとめ

これまでの学校英語教育は、知識を提供してそれを応用するという演繹的な方向の学びであった。それが、小学校英語と言う新しい学びの場を提供することによって、たくさんの事例の中から規則性を見つけ出す帰納的な方向の学びを加えることに繋がる。

小学校英語ではたくさんの良質の「種」をまくことが肝要である。

そのために、小学校英語の指導にあたる指導者には、ぜひとも、正しい発音、正しいリズム、正しい英語で指導ができるスキルを身につけることができるような指導者育成プログラムが求められると考える。

引用文献

- Knoop, H. (2002) *Play · Learning & Creativity*. Aschehoug
Dweck, C. (2007) *Mindset*. Ballantine Books
文部科学省 (2016) 『今後の英語教育の改善・充実方策について～グローバル化に対応した英語教育改革の5つの提言』文部科学省
Graham, C. (2006) *Creating Chants and Songs*. Oxford University Press